

## 【一般演題4】 第19席

## 「江陵張家山漢簡『脈書』にみる三陰三陽説」

京都 猪飼 祥夫

『傷寒論』では病気の経過を三陰三陽の病期にわけて把握している。『傷寒論』に見る三陽は「太陽」「陽明」「少陽」の病期であり、三陰は「太陰」「少陰」「厥陰」の病期に分けられている。三陰三陽の病期による分類を六經弁証と呼んでいる。このような病気の症候の段階による分類法がどのようにして成立したかはまだ明らかではない。ここでは『傷寒論』以前の前漢の文献『脈書』にみる三陰三陽説について検討を加える。

江陵張家山漢墓は湖北省江陵市の郊外に位置し、『脈書』が出土した墓（M247）は前漢の初めの墓であり、多くの竹簡の文献が発見された。その中で医学書は『脈書』と導引を述べた『引書』の二書である。

『脈書』は湖南省長沙市の郊外の馬王堆で発見された『陰陽十一脉灸經』『脉法』『陰陽脉死候』と名付けられた文献を含む。その内容は、前半の馬王堆の帛書類にみられない化膿した疾患の病名解説の部分、『陰陽十一脉灸經』の部分、『陰陽脉死候』の部分、『脉法』の部分、治病の部分に分けられる。

ここでは、陰陽十一脉について記述している最後の部分の陰脉陽脉についてうかがうと、次のように述べている。「凡そ陽脉は十二、陰脉は十、全部で廿二脉、七十七病である」

陽脉が六脉、陰脉が五脉で合計十一脉となり、左右にあるので二十二脉となる。十一脉の病気が七十七数えられている。手に現れる肩脉耳脉歯脉も陽脉に含まれると考えられている。ところがその後に続く三陽三陰の説ではどうも手の脉は含まないらしい記述がみられる。「凡そ三陽は、天の氣である。其の病はただ骨を折り口を裂く、一死だけである。「凡そ三陰は、地の氣であり、死脉である。臧（臟）を腐（くさら）し、腸を闢（爛くさら）して、殺すことを主（つか）さどる。陰病にして亂れたらならば、則ち十日を過ぎないで死ぬ。」

三陰は死に至る病として述べられている。死を視点として十一脉を眺めてみると、足の三陰しか死に至ることを言っていないので、手の二陰脉はどうも含まれていないようである。三陽は足の脉だけを指しているように思われる。『脈書』の三陰三陽は足の鉅（太）陽・少陽・陽明と足の泰（太）陰・蹠（厥）陰・少陰を指している。『脈書』にみる限りにおいては、陰陽説の発展が三陰三陽説となったと考えられ、五行説とは係わらないと思われる。『傷寒論』が『黃帝内經』から三陰三陽説を取り込み発展してきたものだとよく言われているが、もしかすると別の理論体系から成立したものかもしれない。

この三陰三陽説を鍼灸臨床に応用するとき、経絡上の病期の時間的変化と病状の深化として捉えられるものである。旧来、経絡間の病状の伝播は『難經』の六十九難七十五難を視点として治療がされてきた。しかし病状の深化は必ずしも五行の相克や相生として伝播するのではなく、『傷寒論』に説くように表から裏に向かって病状が深化する場合もあると考えられる。そこでは足の三陽と足の三陰は、病期の深化の状態が違うものであり、足の三陰の脉において反応がある場合、おおむね死の転機をとる可能性がある疾患である。死の転機とは古代における医学状況での話であるが、今なお病状の悪化をあらわしている。

三陰三陽の七十七病の中で、足の泰（太）陰の脉には五ヶ所、足の蹠（厥）陰には一ヶ所死という言葉が出てくる。足の少陰には死という言葉を見ないが、足の三陽の脉の病と比べて明らかに悪化した病期を示している。鍼灸臨床において足の三陰の脉を扱うときにはこのように病期の深化を想定しておかないと証の正しい把握はできないのではないかと考えられる。